



新宿山吹だよりは、保護者の皆さんにも読んでもらって下さい。

「イスラエルとパレスチナ」

校長 永浜 裕之

10月7日、イスラム主義組織ハマスによるイスラエルへの大規模攻撃は世界に衝撃を与えました。イスラエル各地に向けてロケット弾が多数発射され、何百人ものハマスの戦闘員がイスラエルに越境侵入して無差別に殺戮を行い、女性や子供を含む200人を超える人々が拉致され、人質にされてガザ地区へ連行されました。これらの行為は断じて許されるものではありません。報復としてイスラエル軍はパレスチナ・ガザ地区への空爆を強め、ハマスの側にも応戦し、双方の死者は増え続けています。このように、**暴力の連鎖が続くと、それぞれ自分たちの被害現場だけを見て、どんどん相手への憎しみを強めていくこととなります。**

何故、イスラエルとパレスチナは凄惨な対立の歴史を繰り返してきたのか。書くべきか悩みましたが、「この問題を知らずして世界を語ることはできない」と考え、表現に留意しながら、高校生の皆さんに知っておきたいことを書きます。

生徒の皆さんは、「パレスチナでは、生きていく上で不条理な歴史や国際情勢と、どう折り合いをつけていくべきなのか」等、イスラエルとパレスチナの問題を、日本から遠く離れた地域で起きている問題と捉えるのではなく、**人の一生や人間の普遍的な姿を考えると、根源的な問いが多く隠された問題である**ということを認識してほしいと思います。

地中海の東沿岸にある地域は、昔から「パレスチナ」と呼ばれています。南にエジプト、東にヨルダン、北にはシリアやレバノンに囲まれ、イスラエルとガザ地区、ヨルダン川西岸から成る地域です。パレスチナにあるエルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、それぞれの聖地があり、宗教上とても重要な地域です。私はダイビングをするため何度かイスラエルを訪問しましたが、訪問のたびに、日本とは大きく感覚が異なる、中東の歴史を感じます。

現在、パレスチナ人が住んでいるのは、ヨルダン川西岸とガザ地区の2つの地域で、国にはなれず、イスラエルの占領下に置かれています。パレスチナ問題は、狭い場所でイスラエルとパレスチナが衝突しているように見えますが、**イスラエルの背後にはアメリカが、パレスチナにはアラブ・イスラム世界が味方につく、グローバルな問題**です。

パレスチナには「2つの悲劇」と言われています。

1つは、ユダヤ人が長い歴史の中で世界中に離散し、迫害を受けてきた悲劇です。パレスチナの地には、2,000年以上前、ユダヤ教を信じるユダヤ人の王国がありました。しかしこの国は、2,000年ほど前にローマ帝国に滅ぼされてしまいます。その結果、ユダヤ人はパレスチナを追われ、ヨーロッパや中東など、各地に散り散りになります。これを「**ディアスポラ**」と言います。その後パレスチナの土地は、アラブ人が住みようになります。

ユダヤ人は、ユダヤ人の王国にて、**新しい教えを広めていたイエス・キリストを十字架にかけた人達と見なされ、キリスト教徒の差別や迫害の対象**になってしまいました。その結果ユダヤ人は、普通の人が就かないような、金融業といった仕事に就かざるを得ませんでした。中世ヨーロッパのキリスト教国の多くでは、お金を貸して利息を得ることは卑しいこととされていました。やがて金融業の需要が増し、徐々にユダヤ人は富を握るようになります。また、ユダヤ人は宗教を守ることに熱心で、子どもの教育にも力を入れてきました。識字率が高く、知識階級の中でも影響力を持ちはじめます。そんなユダヤ人に対する妬みがあるのかもしれない。「**疫病などの災難が起きるとユダヤ人を迫害する**」という歴史が繰り返されてきました。迫害が続く中、19世紀にユダヤ人の中で、「かつて王国があったパレスチナの地に戻ろう、国をつくろう」という「**シオニズム運動**」が起こります。

もう1つの悲劇は、**パレスチナの地に根を下ろしていた70万人のパレスチナ人（アラブ人）が、イスラエルの建国で故郷を追われたという、パレスチナ人の悲劇**です。イギリスは第1次世界大戦中の1915年、当時パレスチナを含むアラブ地域を支配していたオスマン帝国を切り崩すため、**アラブ人に対して「オスマン帝国と戦えば独立国家をつくる」という「フサイン・マクマホン協定」**を結びます。また1916年、フランスとイギリスは、**パレスチナを山分けするという密約「サイクス・ピコ協定」**を結びます。さらにイギリスは1917年、ユダヤ系の財閥ロスチャイルドから資金援助を引き出そうという狙いで、「**ユダヤ人の国家建設を支持する**」という「**バルフォア宣言**」を行います。

この3つの出来事は、歴史上、悪名高い「**三枚舌外交**」と呼ばれ、**ユダヤ人にもパレスチナ人にも国家建設を認めると伝えたことで、その後の大混乱を招く元凶**となっています。結局、オスマン帝国の領土は、イギリスとフランスが山分けすることになり、イギリスがパレスチナを支配します。ユダヤ人は「**騙された**」と思いつつ、パレスチナの地に移り住む動きを強めて行きます。

その後、**ナチス・ドイツによるホロコーストが起こり、600万人のユダヤ人が殺害**されました。「もう二度とユダヤ人が迫害されることはあってはならない。」と、ユダヤ人は、自分たちの国を創る想いを強めていきます。ナチスの犠牲者になったユダヤ人への同情もあり、1947年には「**パレスチナの地にユダヤ人の国を創らせてあげましょう**」という国連決議（パレスチナ分割決議）が採択されました。決議では、パレスチナの地をユダヤ人とアラブ人の2国に分けたうえで、エルサレムを国際管理下に置きました。当時、この土地のユダヤ人が占める割合は、全人口の1/3でしたが、56%の土地が与えられました。翌年には、**ユダヤ人がイスラエルの建国を宣言**します。

パレスチナ側からすると、広大な土地を取られてしまうこととなり、**イスラエル建国の翌日（1948年5月15日）には、周辺のアラブ諸国がイスラエルに攻め込み、第1次中東戦争が勃発**します。イスラエルは苦戦しつつ、国連決議で認められた土地は死守します。1967年の第3次中東戦争でイスラエルは、パレスチナ人が住む場所とされてきた東エルサレムを含むヨルダン川西

岸(ヨルダン領)とガザ地区(エジプト領)を占領して、国連の統治下にあったエルサレムの併合を一方向的に宣言しました。国際法上、認められていない地域まで占領し、入植地の建設も進め、パレスチナと呼ばれていた土地のすべてを占領します。25年間で4回も戦争が繰り返されましたが、毎回イスラエルが軍事的に圧倒します。このことにより、国際的には「被害者」とみられていたイスラエルやユダヤ人が占領者となり、一面では「加害者」として見られるようになります。

戦争に負け続けたアラブ、パレスチナ側は、住民がイスラエル軍に石を投げて抵抗する「インティファダ」と呼ばれる住民抵抗運動が広がります。パレスチナ地域外では、アラファト議長率いる「PLO=パレスチナ解放機構」という組織が、各地域でイスラエルに対する武装闘争を展開しました。ミュンヘンオリンピックでは、イスラエル選手が襲われるテロも起こりました。1991年にイラクがクウェートに侵攻したことによる「湾岸戦争」では、イスラエルから遠く離れたイラクから、「アラブの正義のためにパレスチナを解放する」と言い、イスラエルにミサイルを数十発も発射しました。このように、パレスチナの内外で反イスラエル運動が起きてくると、国際社会も「パレスチナ問題を解決しないと何が起きるかわからない」と事態打開を求める声が高まります。

1993年、アメリカとノルウェーの仲介で、イスラエル・パレスチナ双方のトップにより、「パレスチナ暫定自治合意(いわゆるオスロ合意)」が交わされます。「オスロ合意」は、「パレスチナの暫定自治を認める」、「ヨルダン川西岸とガザ地区から段階的にイスラエル軍を撤退させる」という内容で、パレスチナに暫定自治区を設置し、イスラエル、パレスチナが共存することを目指すという合意です。和平交渉の期限とされていた2000年までは、パレスチナ問題が解決するのではという楽観論が広がっていました。2000年夏には、エルサレムをどう分割するかなど、具体的な話も出ていました。

ところが、2000年9月、大変な問題が起こります。エルサレムの旧市街には「嘆きの壁」というユダヤ教の聖地があり、隣接して上側に「岩のドーム」というイスラム教の聖地があります。後にイスラエルの首相となるシャロン氏が、大勢の警察官に守られながら「嘆きの壁」の上側にある階段を上り、イスラム教の聖地「岩のドーム」を一回りして戻ってきました。

生徒の皆さんは、シャロン氏が歩いただけで大変な問題？ という疑問が沸くかもしれませんが、イスラム教の聖地にイスラエルの政治家が行かないことは不文律で、聖地を一回りするというのはパレスチナ人にとっては冒とくです。事実、お祈り中のイスラム教徒は暴徒化し、イスラエルの警察が力づくで鎮圧して死傷者が出たのです。これをきっかけに各地で激しい衝突が始まり、1993年から7年もの歳月をかけて築き上げた平和への希望が崩れてしまいました。これを機に暴力の応酬が始まり、イスラエルの街ではバスが吹き飛ばされるような爆弾テロが起き、報復としてイスラエルが過激派の拠点を空爆します。衝突は長期化し、イスラエルの世論が右傾化し、選挙でシャロン氏が首相になります。シャロン氏は、ヨルダン川西岸の境界に分離壁をつくり、テロリストを食い止めるための分離壁の高さは、高いところで8m、全長は700キロ以上にもなります。

このように、和平交渉がまとまる状況でしたが、イスラエル・パレスチナ双方に「両者が平和に共存したいと思う人」、**「和平交渉に反対する人」**がいるという現実があります。

オスロ合意後、暫定自治政府のトップとしてパレスチナをまとめていた穏健派のアラファト議長が2004年に亡くなり、同様に、穏健派の政治勢力「ファタハ」に属していたアッバス議長が後継となります。アッバス議長は、2006年の議会選挙でイスラム組織の「ハマス」に敗れ、「ハマス」が、2007年からガザ地区を支配することになります。対してヨルダン川西岸は、イスラエルと和平交渉を続けるという立場をとる「ファタハ」が統治を続けています。その結果、**パレスチナ内での平和への足並みが乱れ、和平交渉そのものが中断**してしまいます。その後は現在まで、ハマスがガザ地区からイスラエルに向けてロケット弾を撃ち、イスラエルが報復として空爆することの繰り返しとなっています。周辺のアラブ諸国は、イスラエルに対する憎しみを募らせながら、今も緊張状態が続いているのです。

アメリカがイスラエルを擁護する背景は以下のとおりです。

20世紀になると、アメリカにはヨーロッパで迫害されていた、たくさんのユダヤ人が移住します。アメリカの全人口3億人強の内、ユダヤ系は約500万人です。人数比では少数ですが、**政財界や学会等に影響力を持つ優秀な人を輩出**しています。また、政界にイスラエルの利益を反映させるべく働きかけるユダヤ系のロビー団体があり、民主党も共和党も選挙資金を目当てにユダヤ系ロビー団体に気を使っています。また、アメリカの全人口の1/4を占める、キリスト教福音派と言われる人たちは、その教えの中で**「イエス・キリストがこの世に再来するために、イスラエルを守ることが必要だ」**と訴えています。こうした背景により、アメリカはイスラエルに巨額の軍事援助を続けています。

さて、イスラエルはエルサレムが首都だと主張していますが、国連の統治下にあるという前提で認められていません。そのため、**世界各国の大使館はエルサレムには置かず、テルアビブという都市に置かれています。**ところが**トランプ政権は、アメリカ大使館をエルサレムに移設**しました。このことは、エルサレム全域がイスラエルのものだと象徴的に捉えられる可能性があります。

このことにより、和平交渉はより難しくなりますが、そんな中、**エジプトとヨルダン**はイスラエルとの国交をもち、和平交渉を支えてきました。2国以外のアラブ諸国は、「**パレスチナ問題が解決するまでイスラエルは認めない**」という立場でした。ところが、**アラブ首長国連邦(UAE)**や**バーレーン**が、**続けてイスラエルと国交を結び**ます。パレスチナ問題が膠着する中、イスラエルは、**パレスチナをそのままにして、アラブの国々と和解できれば活路が開けると考え**ます。優秀なハイテク産業をもつイスラエルと、オイルマネーを持つアラブの産油国が手を組むという、双方の利害が一致したのです。**スーダンやモロッコといった、アフリカのイスラム教国もイスラエルと国交を結び**ます。

「パレスチナ問題が解決するまでイスラエルは認めない」という「アラブの大義」の鉄則が崩れ、パレスチナ人の一部は裏切りだと怒っています。**サウジアラビアとイスラエルの交渉が進展**する中、**今回の事件は起きてしまいました。**

生徒の皆さんは、どのように考えますか。